
石川三四郎著作集

第8卷

自叙伝

月	1	報
---	---	---

私の石川三四郎論
石川君をしのぶ
『自叙伝』について
吁不盡先生
石川さんの想い出

北沢文武 1
荒畑寒村 9
家永三郎 10
後閑林平 13
近藤真柄 14

青土社

私の石川三四郎論

北沢文武

没後二十年、生前よほど有名だった人でも、そろそろ世間から忘れ去られようという頃になって、石川三四郎は、その評価がようやく高まってきたという感じである。昨年（昭和五十一年）暮、東京・駿河台の雑誌会館で「石川三四郎さんが亡くなって二十年の会」が開かれたが、そのときの感想を、大沢正道氏は次のように述べられている。

——ぼくは精々四、五十人も寄るだろうかと予想していたが、案に相違して倍近くも集まった。老・中に比べて若いが多いが目立った。

参会者の一人鶴見俊輔は、一九五一年、石川の最後の公的活動であった近代学校に招かれて行ったところ、本郷の

焼けビルの一隅を借りた教室に集まったのは、石川や彼を入れてわずかに八人、びっくり仰天したと回想し、今日の「盛会」に感無量だと結んだ。

もともと八人が八十人になり、八百人になり、八千人、八万人になりしたところで、石川はさして喜ばないかもしれない。彼は常に積極的な少数派だったし、人間を員数でみることを、いつも拒否したひとだからだ。国家に対しても、政党に対しても、どんな運動に対しても、「オレはオレさ」で通した。（中略）この石川に、ぼくは、頭を垂れる。金魚のうんこのように、威勢のよい方につながって、いつでもスポットライトをあびたがるのではなく、スポットライトは二の次、三の次にして頑なに「オレ」を持つる精神は美しい。感動的ではある。

小説「安曇野」に登場する何百という人物のうちで、石川三四郎を一番敬愛すると作者の臼井吉見は述べている。臼井はまた、石川は外なる社会の不合理との闘いと、内なる自分との闘いを二つながら引き受け、特に後者を重視したと指摘する。内なる自分との闘い、これを石川は古風に無明との闘いと呼び、モダンに生活態度の革命と名づけているが、同時代の社会主義者のだれにもみられない、宇宙的虚無感と「骨と肉と血のある人間」の肌ざわりは、この

内部に向けられた眼差し所産であろう。

石川が亡くなって二十年、彼の存在が忘却の罅から光を放ち始めたのは、それだけ無明が窮まったからであろう。

(以下略) (昭和五十一年十二月二十五日付『朝日新聞』夕刊)

無明が窮まったせいかどうか、石川三四郎は生まれ故郷の埼玉県本庄市でも、没後二十年たって、ようやく「名誉市民」の一人として認められるようになってきた。ちなみに生家の現主人である五十嵐又八氏は、「私どもは幼い頃から、身内に石川三四郎という社会主義者がいることを絶対に口外するな、たとえ尋ねられても、叔父さん(三四郎)については何も知らぬと答えるよう、親たちから厳しくいましめられてきました。だから私の家には、今でも叔父さんの著書は一冊も置いてありません」と述懐しているが、これが昭和五十二年正月の談話であるから、戦前の状況などは推して知るべしである。たとえば大正十五年に郷里の青年団が出した「講演会中止声明書」なるものが残されているが、その内容は、およそ次のようなものだ。

——われわれ旭村(現本庄市)青年団は来たる三月十四日に、郷土出身の学者である石川三四郎先生を招いて講演会

を開く予定であった。しかし、このたび村の有力者たちから強い勧告を受けて、ついに同講演会を中止せざるを得なくなった。ここに深く遺憾の意を表する。

われわれも石川先生を招くにあたっては慎重な討議を重ね、あくまで社会主義者としてではなく、郷土出身の名士として話してもらおうべく、すでに警察当局の了解もとり、小学校講堂も貸してもらうてはすになっていた。ところが、村政当局者たちは、「なぜ石川氏のような人物をわざわざ招くのか、その理由が納得できぬ」「演説中に不穩の言あらば直ちに中止するとしても、それは害毒を流した後の処置で、とうてい主催者側の責任は免れない」というのである。われわれは、その杞憂であることを重ねて説いたが、村の有力者たちは聞き入れず、「とにかく中止してもらいたい」という線をゆずらない。結局、ここに涙をのんで中止するのやむなきに至ったのである。

最後に誤解なきようあえて付記するが、われわれ百二十名の青年団員は、一人として社会主義者にあらず、一人として過激思想をいだく者にあらず。

右、声明するしだいである。——

こうして長い間、この「日本が世界に誇るに足るユニイ記そう」ということになった。前者については、あれこれ検討したあげく、次の一文がよろしかろうということになった。

私は何時も永遠を思ふが故に
時間を限つた成業を願はない

これは、昭和九年十月、石川三四郎が『ディナミック』終月号に執筆した「回顧五年」なる文章の結びの部分であるが、彼が八十年の生涯をかけてつらぬいた「生きる姿勢」とでもいふべきものが、一言で表わされているような気がする。

昭和二年春、晴耕雨読の「土民生活」をめざして千歳村に移り住んだ石川三四郎は、同四年十一月から個人誌『ディナミック』を月一回ずつ発行して独自の啓蒙運動を展開したが、彼の「扇動者たらんよりは教育者たらん」という信念に基づくスローテンポな行き方は、味方の陣営からも理解されず、一方では権力側から発禁また発禁の弾圧を加えられて、五年後には刀折れ矢尽きた感で廃刊を決意せねばならなかった。その終刊号は、わずか一頁という、みすばらしいものである。しかし、同号に掲載された彼の「回顧五年」なる一文を目にする者は、たとえ世に容れられぬまま朽ちるとも、自己の信ずる道をひとすじに歩みぬ

ク大な思想家」に対して、郷里はおよそ冷たく無理解であり、戦後でさえ、彼をほとんど再評価することなく忘れ去ってきたのであるが、——その地元でも、一年ほど前から旧旭村山王堂(旭山)の市議さんなどが中心になって「石川三四郎翁顕彰会」なるものを発足させ、縁故の人々を囲む座談会をもったり、写真展を開いたりしたので、最近では石川三四郎も「国賊」から「名誉市民」に格上げとなり、ついには市の中央公園に、横八尺・縦六尺五寸という立派な顕彰碑を建てようという運動まで始まった。

二

石川三四郎さんの顕彰碑建立が本決まりになったので、ぜひ参考意見を聞かせてほしい旨の通知をいただいて、ある日曜の午後、市民会館で開かれた準備会に私も出席してみた。特高の尾行つきだった頃から石川三四郎を敬愛してきたという市内在住の医師や、保革の市会議員、美術サークルの代表なども顔を見せ、「三四郎さんは中国の泰山に登ったとき、始皇帝が建てたという「無字の碑」を見てすごく感動したそらだから、何も刻まない碑にしたらどうだろう」など意見百出したが、結局、正面には、石川三四郎の書いた文章の中から適切な一節を選んで刻み、裏側には略歴を

こうとした先覚者の気概に触れて、思わずエリを正すに違いない。

その中で石川三四郎は、これ以上『ディナミック』を発行し続けることができぬのは残念であるが、「深く根ざされた思想の生命があれば、それは一陽来復の時節を得て必ず芽を吹くであろう。私は、常に同志を百年の後に求める気持で、ものを書いてきたつもりである」と述べ、これから取り掛かるうとしている「真実の歴史」の研究も、今の世の中では公表することも許されまいが、「だが、私は何時も永遠を思ふが故に、時間を限つた成業を願はない」と言い切っている。その後の、彼の地味ではあるが不屈の生涯を思うとき、ひときわ輝きを増してくる一文である。

三

もつとも石川三四郎の、「常に同志を百年の後に求め」「何時も永遠を思ふ」姿勢には、時代より一步を先んずるがゆえに世に受け入れられぬ者の、静かな憤りと悲しみが感ぜられないでもない。それは「さとり」とか「あきらめ」とかに似ているが、逆である。あくまでも己の信ずる道をあきらめずに進もうとするからこそ、ときに彼は沈黙し、ひそかに百年の未来を思うのである。

万邦無比であり世界中で最も進歩したものである事を悟らせたのである。」

石川「私の考へでは、国体といふものは単に物理的なまたは機械的な説明で理解する訳には行かないし、またさう理解してはならないと思ふ。国体といふものは国民の地理的歴史的感情による特殊な社会的意識とその感情とに基いて成立するものであると思ふ。」

「吾々は国家の一細胞であると同時に、世界の一細胞なのである。吾々はこの国土に行つてもその人類によつて相互に扶助される。国家が保護しない場合でも国民からは人情を以て迎へられる。かうした世界的関連の中にある吾々が、特殊な切実な愛情を祖国の同胞及びその中心人物に寄せるには、そこに非常な力強い感化力が働いてあなくてはならない。そして、その感化力は武力や警察力による統制によつて生ずるものではない。それは同胞相互の間に醗酵される切実な愛情から来なくてはならない。こゝに経政の苦心を要する。日本の歴史上に於て、武家政治が成立した所以、また武家政治成立以後の社会人心の帰趨等を顧みる時吾々は単に脳髓と他の機関との生理的関係を基準にして此問題を解決することはできない。問題は如何にして国民全体の愛情を集め得るかにある。」

『ディナミック』が廃刊に追い込まれる寸前、同紙上で、石川三四郎と浅田一との間に大論争が繰り広げられたことがあった。きっかけは石川三四郎が、著名な医学博士であり社会学者であり法学者であり、要するに「良識」の権威者であった浅田一の「私の国体観」なる論文を、「時代錯誤の危険な主張」と批判したことによる。結果的には、石川三四郎こそ「時代錯誤の危険な主張」者ということにされてしまったわけだが、「百年の後」はおるか五十年もたつたぬ今日、この両者の言い分を並べてみれば、いずれが「良識」に立っていたかは明白である。

浅田「饑餓の時、皮下脂肪も、筋肉も痩せて、骨と皮とになり、内臓も半分位に小さくなつて居るのに、ひとり脳だけが重量も容積も平常の状態のままであることや、失血の際、全身が頸動脈や心臓から血液の流失するため全く蒼白になり、筋肉も内臓も血の気を失ふに至るに拘はらず、ひとり脳は相当の血量を有して居る事実などを反覆実地に見て、人体では脳の為には全身の細胞が悉く自分を犠牲にして居るのだといふ感が益々強くなり、之は我日本の国体そのままであると思ふ。」

「私は若い国民にこの自然の啓示を領得させて、我國体は浅田「私は国体の科学的研究者ではなく、自分の専門から人体構造の妙に感嘆して世の国体論者に呼びかけ、之を参考にさせて頂きと申した迄です。所でこの人体はもともと只一つの受精卵細胞の増殖分化したもので脳も手足も同一の細胞からのわかれであり、受精卵以来脳も手足も同じ血で養はれてゐるのです。我國では我々の祖先を数十代溯れば大抵皇室と人民とは血をかけた関係であります。之は外国にはないのであります。」

「國でも一旦緩急ある時には天皇の存在の重要さがわかります。大臣や大統領などに対しては我々は同列だと内心考へて居ますから絶対的服従が出来ません。反対の意見の人も出て来て国論が二つにも三つにも分れ、挙國一致の実は中々揚らないものです。かゝる時天皇の々語は鶴の一声ともいひませうか、全国民はハハツと服従します。平素余り忠臣らしくも見えないものでも日本人はイザといふ時には立派な忠臣となり、戦争をしても意気込が違ふのです。」

「我國体が優れてゐると説くことが、如何して世界各国との協調を妨げるのだらうか。又世界人類愛活動を妨げるのだらうか。」

石川「浅田氏の論文はもつと長いのだが、紙面が狭いので已を得ず、後部を割愛せざるを得なかつた。同氏に対

して甚だ相すまぬと思ふが、こゝに御赦しを乞ふ。同氏は吾々と境遇も違ひ、社会思想の根本から違ふのである。こゝから討論は大切にすべきであらう。かうした問題に就いて思ひ切つて突き込むことの自由を持たない吾々は、先づ沈黙の自由を守るに如くはないであらう。」

両者の論争の要旨は、およそ右のようなものであるが、当時、浅田から「皮相的觀察で批評されては閉口」などと侮辱されながら、黙って引き下がらねばならなかつた石川三四郎の心境はいかばかりであつたらうか。ちなみに「私は何時も永遠を思ふが故に、時間を限つた成業を願はない」という一文は、この一ヶ月後に書かれたものである。

『ディナミック』が廃刊となつた頃から、情勢はさらに悪化した。太陽も月も姿を消し、石川三四郎は夕空にかすかにまたたく星であつた。七年後に太平洋戦争が始まると、闇はいつそう深くなつた。そのとき石川三四郎は、最も輝いて見えた。

四

最初に触れた「石川三四郎さんが亡くなって二十年の会」でも述べたことであるが、私は彼の伝記『石川三四郎

内にも、小さな倉庫様のものを建設したら如何でせうか。費用は余程かゝりませうか。物資不足の今日とはとても望みうすですが、平和回復の折には早速着手すべく今から計画を立て、置いては如何でせうか。出資者なども物色して渡りをつけて置く必要があります。 (昭和十八年三月五日付)

——今日の日本の指導者の無智無常識無定見には笑ふに笑はれぬ哀はれさがありますが、併し、その中には、天の為さしめる真実が寧ろ暗示、現示されるのは面白いです。田翁、今生存し給はゞ何と言ふらん。(昭和十九年六月三日付)

——久しく御無沙汰いたし申訳ありません。時局急転の結果何れの方面も常規を逸し、今後も如何になり行くか些かも予測をゆるされぬ情勢となりました。(中略)小生も本年は七十歳になり所謂古稀の齡に達しました。何のなすところもなく徒らに馬齢を重ねたのみですが、併し何時までも生き延びたいです。毎日農事を手伝いながら、自分の勉強に精励してあります。唯だ参考書殆ど全部が東京の家に置いてあるので、思ふやうに進歩しないのが残念です。この戦争も今後幾年続くか分りませんが、併し素人考えでは、もう余り長くはないでせう。メリケンさんが本土上陸でも

の生涯と思想』全三巻、鳩の森書房)を書き上げてみて、その八十年の歩みの中で、第二次世界大戦中の「精神的」姿勢に強く心うたれる。

当時、すでに石川三四郎は七十歳に近かつたし、開戦の年に随筆集『時の自画像』などを発禁にされてからは「鳴かず飛ばず」の状態であつたが、それは表面的、外見のことと、たましいの領分ではしどといばかりに抵抗の姿勢をくすまなかつた。実際、彼が戦時中に、田中正造翁の弟子である島田宗三氏あてに書き送つた手紙などを見ると、さすがの軍国主義者たちも、石川三四郎の心の中には一歩も踏み込むことができなかつたことがわかる。

——其後、藤岡の人々(足尾銅毒事件で闘争中の谷中村近辺の人々「北沢註」)は、どうなつたでせうか。私も心中には忘れたことはないのですが、私なぞが出て行くと却て当局の神経を刺激して、運動の発達を阻害するであらうと思つて遠慮してあります。田翁(田中正造)がみられたら、そんなことは平気ですが、今日は別です。翁を思ふこと切なるものがあります。(昭和十六年十二月三日付)

——田翁遺品保存の件、まことに同感です。田中霊祠の境

を試みれば、恐らく致命的打撃を蒙つて、戦争そのものが終幕となりはせぬか、私はこんな風に考えてあります。兎に角、これを機会に日本人は深く反省し悔改すべきであると思ひます。その意味に於て、これは日本の為に好き戦争であり、メリケンさんに感謝すべきであります。(昭和二十年六月十一日付)

石川三四郎は、開戦前夜に発禁となつた著書『時の自画像』の序文中で、「満座の者が酔つぱらつたからとて、酒を飲まずに酔うわけにはいかない。ましてや正気で酔つたふりなぞできない」と書いたが、やがて武者小路実篤、高村光太郎、斎藤茂吉らが「聖戦」賛美の大合唱を始めた頃になつても、「たとえ一億国民が戦争を謳歌しようとして、なお私には沈黙する権利だけは残されている」として、あくまで時流に迎合することを拒み続けたという。後に秋田雨雀が、彼を「日本の良心」とたたえたのも、なるほどと思えるようなエピソードである。

前節でも触れたように、石川三四郎の存在は北極星みたいなもので、位置はほぼ不動であるが光はあまり強くない。情勢が悪くなつて太陽や月がいち早く姿を消すと、初めて光が増してくる。明治末期の社会主義の冬、大正デモ

クラシーの衰退期、そして第二次大戦の最中などには、石川三四郎の存在は一きわすぐれたものであったが、敗戦と同時に、またぞろ元気のよい星くずたちが光を競うようになると、とたんに彼は忘れ去られてしまうのである。

五

西岡陽子さんという小学校の先生が、三年生の子どもたちに、民話「八郎」の、すばらしい版画を共同製作させた。その作品の一部が、雑誌『教授学研究』5号(国土社)に紹介されているが、縮刷された写真版でも実に迫力がある。上野省策氏の寸評も「この素晴らしい表現、このたくましい表現が、九歳児の手から生まれようなどと想像した教師があつたであろうか。私はただ驚く。」と手ばなしのほめようである。同誌には「心を描かせる」と題して、西岡先生の書かれた授業実践記録も載っているが、その中に土門拳の「神護寺金堂薬師如来立像面相」という写真ポスターを子どもたちに見せる場面がある。仏像の顔を少し横側から大写真したのだが、子どもたちは、「ぼくらの方をにらんでるみたいや」「こっちに出てきそうや」「目玉をむいてるみたいや」などと口々に言う。その時、西岡先生の語りかけることばの中に、「この写真からも、何かわからんけど、もらえ

そうだねえ」というのがあって、私は非常に心をひかれた。

私がおざわざこうした例を引くのは、石川三四郎のような人物の場合、その思想の是非を一まず別にしても、「もらう」べきものが非常に多いと思うからである。戦時中の手紙に象徴されているような知性的で誠実な態度や、時にはキリスト教に傾倒し、時にはマルクス主義にひかれ(この点について『自叙伝』などでは、最初から否定的見解をもっていたように述べられているが、たとえば彼が獄中で書いたという『西洋社会運動史』の初稿には「カール・マルクスの名は、おそらく社会主義史上に於ける最高最大のものなるべし」とあり、その内容もかなりマルクスびいきである)、ついには独自のアナキズムに到達するといふ思想的変遷を経ながらも、終始一貫、反戦、反権力のヒューマニストとして生きぬいたことなど、現代人に欠落しがちな側面を豊富に備えていた人物という意味においてだけでも、簡単に忘れ去ることのできない一人だと思つても、政界などを見ていると、社会の指導者を志す上で、かくも誠実なヒューマニストであることは、むしろ忌避すべき条件のようにさえ思われてくるが、そこが大沢正道氏に言わせれば、「石川が亡くなって二十年、彼の存在が亡却の闇から光を放ち始めたのは、それだけ無明が窮ったから」

ということになるのであろう。

石川三四郎の思想については、すでに大沢氏の「石川三四郎論」(筑摩書房『石川三四郎集』などに収載)など、すぐれた研究があるし、ここで改めて論ずるだけの力量は私にはないけれど、少なくとも「ヨーロッパへの亡命は、結果的に石川氏の社会主義思想を大きく転換せしめ、社会主義運動家としての生命を失わせることになった。これ以後の彼の活動には、ほとんど見るべきものがないといつてよい」

(中村尚美—早稲田大学出版部『社会主義者の書翰』解題)というような評価よりは、「石川三四郎氏は、歴史に残っているその二十代の革命家としての活動によってよりも、その後の五十年の活動によって、さらに偉大であった」(鶴見俊輔—理論社『自叙伝』下解説)というような見解に対して、私はより共感を覚える。荒畑寒村氏も「石川君の思想の是非は別として、君の信念の純粋性だけは疑えない」と述べられているが、没後二十年にもなる石川三四郎を「現代」が必要としているとすれば、おそらく彼のあれこれの主張そのものというよりは、それらの背景をなす、それらを貫ぬいている、石川流の姿勢とでもいふべきものによるのではなからうか。

(昭和五十二年八月)

石川君をしのぶ

荒畑寒村

十月末に、岡千代彦君が亡くなりました。それから一月たらずで、石川君が亡くなり、これで最初の平民社時代の先輩の最後の生残りがなくなつたと思ひます。今でこそ年をとっていますから、石川君などといえますが、何しろ向うは大先輩ですから「石川さん」でありました。他の先輩にくらべるとひととなつこい人でした。片山潜さん、安部磯雄先生、幸徳秋水、堺利彦のなかでは、石川君だけには先輩というより兄貴分のような感じがして、隔意なくつきあえました。このように優しく、最近の流行語でいうとW過剰とでもいいますか、眉目秀麗。声がやさしい。演説なんかには向かなかつたが、人とのつきあいには、はじめての人でもなつたものです。

といって、いつも温和というんでもなかつたので、日露戦争たけなわの明治三十八年三月頃、社会主義伝道隊とい

うものが出来たのは、石川君の提唱によったものでした。平民社で、金をあつめて大きな太鼓を買い、赤いキレの長いのを買い、それに石川君が「社会主義伝道隊」とかいて、多い時には三十人、少い時は十五、六人くらい、芝の神明、築地、神田、下谷あたりに伝道に出かけた。その時分にはまだ「宣伝」という言葉がなかったので、「伝道」といつていたのですが、太鼓をたたいて、人をあつめて社会主義の檄とか、チラシをくばったものです。そして、その先頭に立ったのが石川君だったので。

四月ごろ、上野の竹ノ台に集まったとき、三十人ばかりが下谷警察につれて行かれ、婦人も二人加わっていました。そこで、なぐる、けるの暴行をうけて、あの大事な太鼓の皮も旗もやぶれてしまうという惨たんたる有様でした。もちろん石川君もひどいめにあったが、そのあと、平民社にかえってからの石川君の演説は、石川君一代の名演説だったのではないかと今でも感じているのですが、そういう勇敢なところもあつたのです。

大正九年（一九二〇年）十一月に石川君は日本にかえってきました。私は大阪にいあわせたので、みんなと神戸にゆき、用意の赤い旗をふって迎えました。石川君は非常によろこび、上陸するなり私をひっかかえて、両方のほっぺ

たにキスされたのには、非常にびっくりしました。

その後はおたがいにかちがって、お目にかかれませんでした。大へんお悪いという話をうかがって、家内といっしょに見舞にゆきました。久しぶりに逢って、床の上にいる石川君と手をとりあつて、思わず二人とも涙にかきくれたのでした。

年に不足はないに致しましたが、まだまだ石川君からきいておこなうてはならぬことが、実に多かつたのですがそれができずに終ってしまったのは、かえすがえすも残念です。（石川三四郎をしのぶ会にて、昭和三十一年十二月）

『自叙伝』について

家永三郎

日本の近代的民主主義発達の最初のピークが明治十年度の自由民権運動であるとすれば、これに匹敵する第二のピークは、明治三十年代の社会主義運動であろう。ことに後者は、たとい今日からみて理論的にいかに幼稚であり混乱動など、室町時代の土一揆同様の歴史的事件であり、その当事者からじかに話をきいていることに異様の感銘を禁じ得なかつたのである。

この自叙伝は、独自の社会思想をもつて一貫した信念の生活をつづけて来た石川君の精神的遍歴の迹を物語る貴重な記録であり、自伝文芸として芸術的にも香気の豊かな文章であるが、同時に黎明期の日本社会主義運動に関する、体験者自身の手になる記録として、高い史料価値を有する、と云うことができよう。その渦中にある人物の感覚を通過した限りの社会主義運動史であるから、そこに主観的偏差も生じているかもしれぬが、文献だけによって記した編纂物には求め得ない、なまなましさと、血の通った具体性が見られるのである。大逆事件犠牲者の死刑執行当日の同志の興奮した心理状態を描いた一齣のごときは、その意味で、本書の圧巻と称するに足りるであろう。

明治社会主義運動の指導者の自叙伝としては、安部磯雄の『社会主義者となるまで』、堺利彦の『堺利彦伝』、片山潜の『自伝』があるが、いずれも社会主義運動に身を投ずる以前までのことしか書いてない。木下尚江の『懺悔』も、三十年代についてはくわしくないし、幸徳秋水にはまとまった自伝がない。やや後輩の山川均の『ある凡人の記録』や荒畑寒村の『ひとすじの道』などがあるにすぎないの考えると、本書はひとしおたいせつな文献である、と云わねばならぬ。

私は、ある縁故から戦後はじめて石川翁にお目にかかり、明治時代の昔語りを何回かきかせていただいたが、歴史上の人物と対談していることに不思議な気がしないではいられなかつた。大正生れの私にとって、平民社の反戦運

本書の中には、翁の同志であつた社会主義者を始めとして、翁と直接交渉のあつた多数の人物が、登場するが、それらの人々はおおむね種々の点で歴史上に大きな役割を果たした人々であり、本書はそれら歴史的人物の横顔を伝えるものとして、断片的ではあるが、貴重な伝記史料を数多くふくんでいる。例えば、内村鑑三・黒岩涙香・堺利彦・幸

囿、流離、悪戦ながき君が日の
終りの床の白菊の花

骨に堪へ涙に耐へし八十とせの
君を偲びて春雨の窓

この春も君が家裏の野芹の香たちそめたるに
君は早や亡く

黒旗の色にもましてまぎびしく
君亡き春の立ち深みたる

君が住みし千歳の里の森、木立、
いまは見る目に露しげくして

「即身説法」—君がかたみはまことこの一語に尽きて
あわれたふとし

春遠き世はなほ永く続くべしおのれいとひて咲き、
散れ白梅 『アフランシ』第三十四号、一九五七年三月十日

石川さんの想い出

近藤真柄

者をまごつかせたり、「これは彼女のババです」と、彼女の恋人や亭主を紹介するあわて者も出たのであった。

今から33年も前に、「今年からは55年前」クリスマスや誕生日には、自家でダンスをやるんだときいて、いささか遠い社会の人のように思ったことがある。いやそれ以前に逢えば抱きついてキスをしたり、歩くときには、後ろから抱えるような様子をするので、野暮天は少々へキエキし、無気味を感じ、フランスの百姓は、貧乏育ちの東京者とは到底お派ちがいだと思った。石川さんには洋風がしみついていたのである。

私は、まあ坊、まあちゃん、まあさん、真柄さんと、だんだん格上げの呼ばれかたをして、生れたときから、五十三の今日まで仲間うち、親類すじという格好できたのである。

昭和31年11月29日、お棺のなかの石川さんに最後のお別れをした。生き残っている私の母の別れの言葉をつたえ、死んだ父（堺利彦）へのことづけをたのむ気で、口の中でムヨムヨと言葉にならない感情をお経の如くつぶやいた。そして赤一輪、黄一輪の小さいバラの花を肩においた。同行の九津見房子さんは艶のいい蜜柑を二つソツとくれた。石川さんは、おだやかな奇麗なお顔で、キチンと行儀よく、折目正しい着物をきておられた。袴もつけておられたようだ

石川さんが旭山と号していられたのは、御承知の通りで、当時は多くの人が号を持っており、平民社関係でも、銀月（伊藤）、芋銭（小川）、禄亭（大石）、秋水（幸徳）、枯川（堺）、秀湖（白柳）、楚人冠（杉村）、白熊（西川）、百穂（平福）、孤剣（山口）、介山（中里）、寒村（荒畑）他であるが、旭山は一番明るく派手で大きい。のち不盡といっておられたが、「石川や浜の真砂はつきるとも世に盗人のたねは尽きまじ」に通するので、大望大願の持ち主。

さていうまでもなく石川さんの研究や理論は、他の方に任せでいいので、私が昔書いたものと、亡夫近藤憲二の『無政府主義者の回想』の中で、石川さんを書いたものを抜き出して「石川さん」の面目を出してみようと思う。

お別れの日に

『クロハタ』昭和31年

石川さんはおしゃれだった。夏でも白い手ぶくろをはめておられるのをみた。欧州から帰えられた大正9年頃、茶色のコールドの服をきていられたのが、強く印象に残っている。今のように雑に何にでもつかわれなくて、非常に珍しい外国のものと感ずるときであったから「労働者の着るものなんだ」といっておられたが、それでもおしゃれにみえた。血縁でない婦人に、「ババ、ババ」とよばせてボンヤリ

った。矢張りおしゃれだったなと思った。しかし今度は純日本的であった。

畑と叢の小径を、同志の肩にささえられた棺が、200米ほど先きの霊柩車までいく列の光影は、深く目の中に映った。

12月7日石川三四郎をしのぶ会。友人、同志、後輩二百数十名の集りで、ヴァイオリンをひく、詩をよむ、思い出を語る、礼賛する、思想的解剖をする、素破ぬきをやる。みんないい手向けであった。石川さんの旧い同志、添田蛭蟬坊、柴田三郎、西川光二郎、及川鼎寿、大杉栄、堺利彦の息子や娘の顔もあった。この二代目たちで、親たちが石川さんと一緒にうたった「富の鎖」をうたいたいな、皆さんも斉唱して下さるだろうなと思ったが、いい出せなかった。福田英子氏宅時代から石川さんを知っている九津見房子さんは、散会后四谷見附で電車を待つ間、一人で「富の鎖」をうたいましたよと、その夜電話をかけてきた。

出棺の日も偲ぶ会にも出席された下中弥三郎氏（平凡社社長）は、「いいおくりだった」といわれたそうだ。この言葉にグッと胸もとがつまって、別れを感じる涙が出た。（真柄）

風蕭々として

昭和22年5月日本アナキスト連盟の第二回大会のあとの

懇親会で「オレひとつ詩吟をやるかな」と石川さんは立った。荆軻が秦王を刺すために、秦の国へいくときの「史記」にある名高い詩だ。「風蕭々として易水寒し」若々しい声でうたい、「壮士ひとたび去って」で腰をおとし、両こぶしを握って満身の力をこめ、「また帰らず」で右こぶしをグンと振った。眼は血走り、いかにも単騎敵陣におもむくさまが凄味をおびており、たいへんな熱演、割れるような喝采。石川さんは「余り力をいれると入歯がとぶからね」といって、細い声でへっへっとうたった。(憲二)

誕生会

昭和24年5月、誕生日に糯米から手作りのお赤飯で御馳走になった。誰やかや、何やかや賑やかなところで石川さん「おれもやるか」といい、誰か槍さびをうたえという。野良着の上に縫紋の羽織をきて、二尺さしを刀のかわりに正面をきった。久保譲の槍はさびても名中はさびぬに合わせて、柔らかな体を動かし、「昔忘れぬ落し差し」で惱殺するような流し目をした。植村諦君が「どうだ、あの色っぽさは……」と。皆ヤンヤであった。石川さんは「十二槍はさびても」の感であったのだらう。満七十三歳のときのこと。(憲二)

一点一刻に

昭和26年再建連盟大会に行けぬというので、同志へのメッセージをもらった。これは自伝に出ているが最後の一節「同志諸君、今われ／＼は、自身の熱をより早く、より多く、より密に一点一刻に集結せねばならぬときだと僕は思う。われ／＼は自ら燃料となることを光榮とする。生命そのものを注ぎ込むことを……」と、代読する私は胸が詰まった。……石川さんの書かれたものうちでも、最も感動させられいままも強く刻まれていて、忘れ得ない言葉だからである。(憲二)

いま私の手許に、若雞をすつきりと墨絵でかき、枯れた筆致で「青春飛躍の前日」と誌るされた色紙がある。不盡の署名であるが、石川さんの業積とともに、伝え残したいと思っている。(昭和52・9・4)

□次回配本十一月下旬 第二巻論稿Ⅰ 価三四〇〇円